

## ボランティアと「純粹贈与」

—— 日本語支援ボランティアへの聞き取り調査から ——

渡 邊 秀 司・新 矢 昌 昭

### 要 旨

本稿の目的は、贈与という概念を前提として、日本語支援ボランティア団体でおこなったインタビュー調査を参考にしながら、ボランティア活動について考察していこうとすることにある。

最初にボランティアについて一般的に言われていること、社会福祉という立場から概説する。まず、贈与について一般的に言われていることを述べ、さらに「純粹贈与」という考え方を述べる。そして、贈与にともなう権力性を解消しうる可能性を持つ「やさしい関係性」について述べ、宗教の持つ贈与的要素なども贈与の一事例として述べていく。次に、インタビュー調査の内容から「何かをしてあげたい」ということについて抽出し、その内容について論じていく。最後に、「純粹贈与」と「やさしい関係性」をふまえながら、ボランティア活動が新たな人間関係を創出していく可能性を秘めた人間の営みであるのではないかと論じていく。

キーワード：ボランティア、純粹贈与、「やさしい関係性」

### はじめに

本稿の目的は、贈与という概念を前提として、日本語支援ボランティア団体でおこなったインタビュー調査<sup>1)</sup>を参考にしながら、ボランティア活動について考察していこうとすることにある。

まず、具体的なインタビューの内容に触れる前に、ボランティアとはどういう考え方から始まったのかということ、そして本稿のテーマである「贈与」について論じていく。ボランティアをしていることで、何か得るものはあるのかなどといった、こちらの質問に対して、対象者が答えてくれたことを随時取り上げながら、今村仁司の言う「純粹贈与」という概念や、竹沢尚一郎の言う贈与の考え方などを参考にしながら、論を展開していこうと考えている。

贈与という概念自体、パラドクスをとまなう

概念であるのだが、あえて贈与という概念をボランティア活動の理解のために使用してみたい。贈与のパラドクスについては後ほど述べるが、M. モースは『贈与論』の中で『未開あるいは太古の社会類型において、贈り物を受けた場合に、その返礼を義務づける法的、経済的規則はいかなるものであるか。贈られた物には、いかなる力があって、受贈者にその返礼をなさしめるのか』ということを究明するにとどめる、としている（モース：1962：23）。つまり、人に何かを「贈ること」には、返礼という強制力があり、「贈ること」をした人もそれを期待しているということが、贈与という概念には前提としてあるということである。贈与には上下関係、身分関係を生み出す、抑圧的な要素が生まれる危険性がある。また、贈与という考え方には聖なるものとの関わりも見逃せない<sup>2)</sup>。

モースが言うような考え方が、贈与には前提としてあり、それは決して逃れられないもので

あるのか。ボランティア活動の参加者には大なり小なり「他人に何かをしてあげたい」という感情がある。本稿で焦点とする問題は次の2点である。「他人に何かをしてあげたい」という感情は「贈ること」にともなう上下関係、身分関係などといった抑圧的な関係に転化するような関係性があるのか。そして、抑圧的な関係を生み出さないような「贈ること」が存在するならば、それはどういった関係性であるのか。2点の問題について、本稿では贈与という概念を用いる。

## 1. ボランティアとは

まずは、ボランティアとはどういうものなのか、よく言われていることについて整理していきたい。

ボランティアということの一般的な意味をただ言うなら、以下のとおりである。ボランティアとは、個人、グループ、地域社会が直面する問題を解決し予防するために、あるいは社会や地域社会の向上をめざして、金品・サービスを無償で提供する人々をさして言う。社会福祉、教育・文化、保険・医療など多くの領域でその活動はみられ、その動機に注目するなら、他者を助けたいという愛他主義に基づく行為であり、経済的報酬をとまわらない贈与としてとらえられる。

一方、活動には自己実現や学習の機会となるとともに社会的連帯感を築く機能がある。つまり、心理的な報酬の存在が見られるということである。ほかにも責任感、同情、恩返し意識も動機になるが、その背景としては宗教、文化、社会意識などが大きく影響を与えている。また、社会政策などの点から見るなら、その補完、代替の機能を持つものである。ボランティアと聞くと社会福祉とのつながりを少なからず意識してしまうが、ボランティアはより広範な活動も含む行為である。

もう少しだけ、ボランティアということについて考えてみよう。社会福祉という視点で、田代不二男が以下のようなことを述べている。田代によれば、社会福祉という活動は、施与、慈善、博愛、救貧というような用語で呼ばれていた援助活動が、時代の要請や時代思潮または時代の政府の施政方針によって、一つの社会制度として組織的活動に発展してきたものであるとし、20世紀以前までは慈善活動とされていたと述べている。そして、田代は基督教の社会福祉を論じるという前提を述べたうえで、自らの社会福祉についての考え方を概観する。福祉とは幸福、福利、繁栄を言うが、個人個人の幸福を目標にするとその社会は解体するし、社会が社会の成員の幸福とは結びつかない社会全体に固有の幸福を目標にしたなら、全体主義、あるいは独裁主義の社会になってしまう。目標とする福祉とは人々が幸福であるために不可欠な基本的必要物 (basic requisites) である、という。福祉＝幸福ではなくて、福祉は幸福であるための基本的条件なのだという。さらに、田代はニコラス・レッシュャーの説を引用しながら、レッシュャーの言う身体的福祉、物質的福祉、精神的・心理的福祉についてふれつつ<sup>3)</sup>、そうした福祉が満たされない人がいて、その人たちに手をさしのべることが、社会福祉の原点だということである (田代：1983：9)。

幸福になるための基本的条件として、社会福祉をとらえ、それを提供するためのボランティア活動だけが、ボランティア活動なのであろうか。田代が言うような背景が、ボランティアにはあるのだろうと考えることは間違いとはいえないだろう。しかし、ボランティアに参加する場合、動機については様々あるようである。田代が言うようなことを意識してボランティア活動をしているのかというと、そうでもなかったりする。ボランティアへの参加した理由などを聞くと、以下のような答えが返ってくる。

きっかけは、ボランティアをしようと思っていました。会社も長いこと勤めていましたので、これからは無理して仕事を探してやるよりは自由に、残された時間を、今まで会社でやっていた経済的なことよりも、少し変わった分野を出来たら良いなと思って、ボランティアの講座に参加していたのです。(Bさん)

今までクラブ活動とかバイトとかをやっていた時間がボランティア活動に変わったと言うことです。クラブ活動とかしてたら休みたいので、休みの日は休みになるので。今は他の日が休みなので日曜日にボランティアをしています。参加しようとしたきっかけというのは、なんかの募集を見てなんですけど、外国の方と接してみる、向こうの文化を知ること出来るだろうし、興味もあったからです。(中略) またボランティアをやろうと思ったのは、向こうに行っても将来就職しようとは思わないんですけど、身近で言うか、近くで話せたりとか出来るから。だからボランティアって、そんなに経験とか技術とかいいですよ、これからやっていけばいいということだったので始めたんだと思います。

(Eさん)

ボランティア活動には、中世の救貧院に見られるような身分の差を生み出すような関係性を作らないようにしていく、そうすることによりかなりの神経を使っているのではないかという印象を、今回の聞き取り調査に参加していく中で考えていた。しかし、権力関係を生み出してしまっているのだろうか。それとも、また別の関係性があるのだろうか。また、ボランティアに参加する人たちは、何かを得るためにボランティアに参加しているのではないだろうかという疑問が生じた。

## 2. 贈与について

次に、本稿のテーマである贈与について、論じていくうえでの整理をしてみたい。最初に概念としての贈与論について、いくつかの意見をまとめる。そして、宗教団体がどのようにボラ

ンティアと関わっているのか簡単に述べた上で、教義で語られる贈与的な概念について概説する。

### 2. 1 「純粹贈与」と「やさしい関係性」

もともと贈与とは、家族や恋人たちなどごく親しい関係において行われるものから、政治献金、恩人へのお礼など、多岐に渡る社会関係を示す。

AとBという二人がいて、AがBに贈与を行いBもまたAに贈与を行う場合、それは一種の交換関係になる。対してAがBに贈与を行い、Bがそれに応えないとしてもAが周囲から賞賛を受けるようなことがある場合、それもまた間接的な交換となる。そして、Aの贈与のみが行われる場合、それは純粹な贈与となる。こうした贈与は、友情や信頼といった社会関係を強化するとともに、主従関係などといった地位差をも生み出す。こうした贈与関係の持つ濃密な関係性と、それと相反する緊張感をともなう関係性のうち、緊張感をともなう関係性をともなわないような贈与関係とはどういうものなのであろうか。濃密な関係性という言葉では言い切れない関係性があるのではない。

今村仁司は「純粹贈与のパラドクス」について興味深い論を展開している。今村は、人間は実質的にはバーター形式の交換をしているのに、なぜ返礼なき贈与形式にこだわるのかという問いをたてた上で、純粹贈与について述べている。純粹贈与とは贈与としての贈与、返礼なき贈与のことである。そして「純粹な贈与行為は、『これは贈与だ、私は誰かに与えるのだ』と意識したとたんに贈与ではなくなる」と述べる(今村：2000：114)。純粹贈与とは、贈与行為を贈与行為として自覚してはならない。当事者もまた同様である。純粹贈与においては、返礼を期待しないだけでなく贈与を贈与と自覚してはならないのである。行為として、返礼として意識されてはならないのに、贈与として自覚されなければならない。これが純粹贈与のパラド

クスである。

しかし、贈与においては純粹贈与を基本としている。形式としては成立しないと言える純粹贈与を、なぜ純粹贈与を基本としているのか。それは人間がもつ自然への態度に起因する。人間は自然に対して大きな「負い目感情」を抱いているというのである。負い目がある限り、人間はなんらかの形でその負い目を解消しようとする。負債は定義によって返さなければならない。負い目が義務となり、宗教倫理が成立する。贈与は純粹贈与という現実には成立し得ない形式をあたかもあるかのように用いて、その負い目を解消していく営みであり、その方法として、お互いに負い目を共有していくものと、お互いに負い目を共有しないものがあり<sup>4)</sup>、負い目を共有しないものからは、政治的闘争、権力が生じるのだと今村は言う（今村：2000：126）。

竹沢尚一郎は今村とは視点をかえて、共生という視点から贈与について触れている。竹沢によると、共同体と個人との関係において、共同体が個を与えるのではなく、個がみずから共同体に与えるのだという前提に立ち、他者とともに成長する、他者を支えることで自分が支えられるということだが、贈与の精髓を示す言葉なのではないかということ、そして、他者に対して自分を与えていくとき、他者の成長を見返りとして受け止め、自分も成長することで他者に答えるという贈与の応酬こそ、贈与が支配の道具とはならない望ましいありようだという（竹沢：1997）。

竹沢もまた、贈与という概念の危険性を無視しているわけではない。注意しなければならないのは、贈与の関係の質であるとし、対称的になされた場合には当事者の間に連帯と相互の敬意を生むのだという。しかし、非対称的になされているばあい、先ほどから述べてきた政治的権力、闘争の危険性が生まれる。こうした闘争は共同体が個に対して先験的なものであるとし、共同体によって個が与えられるという考えかた

が背景にあるのだが、現代においては個が共同体を離れた場合においても成立しうる。個が共同体に自らを与えることで、共同体を成立させるということが、成立したのだと竹沢は言う（竹沢：1997：210-211）。

つまり、個が自立的に共同体に関わることができる機会ができ、個がその共同体の維持を願うとき、共同体は成立するのだということを提示したのである。その際に重要なのは、先ほど述べた他者と共に成長し、他者を支えることで自分が支えられるという考え方である。竹沢が言うような関係性は「やさしい関係性」と言い換えることができるだろう。

もちろん、竹沢の言う理想的な贈与ばかりが贈与のあり方とは言い切れない。今村が言う政治的闘争を生み出すような、権力の補完装置としての贈与のあり方も、私たちの日々の生活のなかにおいても見え隠れしている。では、私たちの日々の生活の中で行なわれている贈与という営みは、竹沢が言う関係性の変革のテクニクとしての贈与とどのような違いが見られるのだろうか。

## 2. 2 「宗教」という視点から

視点をかえて、宗教という現象からボランティアと贈与について少し考えてみよう。宗教もまた贈与という考え方を見るには興味深い社会現象であるといえるからである。

95年の震災ボランティアにおいても、宗教団体の関与が見られた。宗教団体が掲げる目標として「人々を苦しみから救う」ということが一つとしてあり、とくに苦しみからの救いを第一義に考える宗教団体であればボランティア活動に関わることは当然のことと言える。震災ボランティアとは関係は無いのであるが、私自身機会があって、信仰を持ち、ボランティア活動をしている人のお話を聞くことがあった。そのときの話で、自らの信仰をボランティアの対象者に対して、あからさまに明示していくというこ

とはしないが、自らの信仰が自分自身の活動に影響を与えていないとはいえないと話されていた。

また、三木英らが行なった震災ボランティアの研究によると、宗教団体が団体として行なうボランティア活動に関しても、宗教団体の名前を明示することによる抵抗感が被災者にあったことから、宗教団体を前面に押し出すことは控え、そのためか宗教団体のボランティア活動がそれほど世間には目立たなかった。震災ボランティアにおいて、宗教はその信仰を持つ人たちの心のケアを行なうとともに、コミュニティの紐帯を強めていったのではないか。しかし、それは信仰を持つ人たちに限られる機能であり、宗教として社会貢献をしたいという想いとは裏腹に、既存の勢力の範囲内で今までの勤めを真摯に果たすのみという、結果として内向することとなってしまったのではと三木らは問題提起し、様々な宗教が行なった震災ボランティアについて述べている（三木：2001）。

宗教団体が利他的な行動をとる場合、現代社会において宗教という枠組みは障害となることが多々あるのではないか。しかし、宗教を大きな枠組みでとらえなおし考えてみると、宗教もより理想的な人間関係の形成に寄与できるのではないか。この点はもう少し考察していかねばいけない問題であるが、宗教団体のボランティア活動についてはこれくらいにして、次に、宗教の教義、本稿では仏教の教義にみられる贈与的な考え方について概観してみよう。

佛教が言うところの与えるということは、「布施を行なう」ということであろう。本来、ブッダが考えるところの佛教には与えるということは明確には示されていない。それは、佛教が悟りというものを主体的に考えていく宗教であったということと関連していると考えられる。悟るということは、自己完結的なものであり、自らの在りようを考えていく哲学的な営みである。

悟りを主体的な目的とする信仰から、より多くの人たちを救うということを自らの信条とするようになったのは、一般的に言うところの大乗仏教によるものであり、これから考えていく布施という考え方が深化・拡大されていったのも大乗仏教によるものである。布施とは、むさぼりの心を離れて衣食などを仏や僧、貧しい人などに施与することを言う。施すものの内容などによって区別され<sup>5)</sup>、布施を行なうことによって大きな果報を得ることができる<sup>6)</sup>とされているが、そのためには清らかな心で行なうべきであるとされている。名利を得るためにはしてはいけない、つまり利他的な行為として布施を考えるというのが、布施を行なう際の心得である。

宗教団体がボランティアに関わる場合、こうした考えが背景にあるのではないかと考えられる。ただし、布施という考え方が無条件にいい考え方だとは言いきれない。布施を行なうというものの先には、「自分自身が良い業をつみ、より良い生を生きることができる」という考え方がある。他者にたいしていい事をするということは、布施を行なう当事者にもいいことがあるということでもある。

ただし、信仰を持つ人たちのボランティアに関わる背景として、その当人の信仰が背景とはなりえないということは早計であろう。この節では贈与という考え方がボランティアにどう関わっているのかということを考えている。震災ボランティアに限らず、宗教団体が主体となっておこなっているボランティアにも、贈与という考え方はないのであろうか。宗教そのもののなかにも贈与という考え方はあり、そうした考え方を背景にして宗教団体はボランティアに関わっているのではないか。

先ほども簡単に述べたが、田代は、冒頭で述べたような福祉が満たされない人がいて、その人たちに手をさしのべることが社会福祉の原点だというのが、そうした考えが、さまざまなボラ

ンティアをこころざす人たちが参加する際の主要な動機となるのだろうか。ボランティアという行為にはさまざまな局面があるのではないか。「何かをしてあげたい」という動機にしても、「何かをしたい」という動機にしても、何らかの対価を得ようとしていないだろうか。ボランティアを行なう“個人”は、それぞれの理由があってボランティアをしているのかもしれない。

対して、ボランティアを行なう団体は、団体としての理想的なボランティアのあり方を、今現在も模索しているのではないか。NGOなどの発展途上国での開発援助活動が最近よく言われているが、開発援助についての問題点もさまざまな立場から指摘されている。援助を行なう側の援助を受ける側に対する理解度のなさなどによる失敗は、どういう問題を背景にしているのか。そうしたボランティアのありようを考えていく上で、贈与という考え方は興味深い視点を与えてくれるように思える。

今回の調査対象である日本語支援ボランティアでは、宗教の直接的な関わりはない。ただ、「何かをやりたい」「何かを得たい」そして、「何かをしてあげたい」という心情はあるのではないか。その関係は、どのように作られているのか。具体的なインタビューの内容を追いつながり、考察していこう。

### 3. 「何かを得たい、やりたい」ということ

日本語支援ボランティアでの聞き取り調査をおこなう前に、わたしが気になっていたことは「ありがとう」という感謝に対するスタンスであった。われわれがインタビューを行った人たちに対して、ありがとうという気持ちについて聞いたときにも、そういうことは重要だろうという答えがかえってきた。それよりも、いくつ興味深い意見がある。多少長い、そのまま引用する。

面と向かって、ありがとう、ありがとうということはこの教室ではない。終わったら、はい、さようならということですから。感謝・・・、気持ちの中で、心のなかで、そういう部分はあるだろうと思いますけれども、感謝の言葉を求めるということは、そういったことはしていないし。そんなにね、感謝の言葉を言わないとここへ来たらだめだということもないし、それで良いと思うしね。教えている中で、わかりやすかったよ、というような形でね、それが一つの感謝の気持ちでね、そういった形で出てくる程度で、教えてくれてありがとう、そんなことは、改めて学習者は言わないし、それで良いと思うよ。

よく言われるのが、教えるのではなくて、サポートする。日本語を各自が、学びたいと思っていると思っているので、応援、サポートするのが、全体のこの日本語ボランティアの主旨であるから、教えてあげるという上から下への性格ではない。ある意味では対等、一緒に勉強する、外国のことを教えてもらうことができるのであるから、余り感謝とか報酬とかいうことは考えないですね。(Bさん)

今の私の考えだと、ボランティアをする人が「やりたいからやってる」というのが、真理というかあると思うんですよ。ボランティアしてらってる人が思うんじゃない。だから「したいからしてる」というのがあるので、その思いやる、相手を思いやりたいたいからやってるという、いってみれば自分がやりたいからやってるんじゃないかなというのがあるんですよ。

じゃないとボランティアしてらってる人も、されてるっていうんじゃ、全然思いやりとは違うんじゃないかなと思う。思いやりの気持ちが出来るかどうかは、自分がやりたいからやってみて、人を思いやる心が出来たんなら、それはそれでいいだろうと思いますけど。単にそれをやったからといって思いやりの心が生まれるかっていったら、なんとも、生まれるかも知れないし、生まれないかも知れないと思いますね。だからボランティアはやりたい人がやっていると、いう大前提があると思いますね。自身でも「やりたいからやってる」という感じですよ。

でも、自分が力になればって思ってる人もいると思うんですけども、やっぱりその中にも「自分がやりたいから、向こうの力になりたいから」というのが根本にないと、相手のためだ

けっていうのは実際にはどうなんだろう。そういうのもあるのかも知れないですけど、私はどっちかっていうと、「自分がやりたいからやっているという、助けてあげたいから助けたいというか、協力したいからっていうのがあるんじゃないかな」って思ってます。(Eさん)

窮地にある人たちに手を差し伸べることは、相手がかわいそうだからというだけでできるものではなく、自分自身が「手を差し伸べたい」という気持ちにならなければ、無理なことなのではないか、ということ述べている。竹沢が述べたような、他者とともに成長し、他者とともに自分が支えられているのだ、という意識があってボランティアは成立するのだと、インタビュー対象者もいっている。

ボランティアを行っていくためには、ボランティアをしていく側と、される側との対等な関係性を築き上げていくことが、重要な要素なのであろうか。お互いが対等な目線であるということをしかりと認識した上で、受け手に対しても接していく関係性を、「やさしい関係性」と言うことはできるだろう。Bさんの答えは、そうした「やさしい関係性」を築いていくことで、ボランティアは成り立っているのでは、という意見である。

しかし、「やさしい関係性」は純粹にやさしいのだろうか。やさしさということとは、ボランティアを行う上では重要な要素といえるだろう。ただ、Eさんは、ボランティアの受け手、今回聞き取り調査を行った日本語支援ボランティアの場合、日本に住む外国人ということになるが、その人たちが「して欲しい」ではなくて、外国人に「日本語を教えてあげたい」という気持ちを、日本語を教える人たちが持つことが重要なのだというのである。

つまり、教える人たちが自発的に教えたいと思うことがまずは大切なのであって、そうした気持ちを持たないでボランティアに参加することは、教えてあげている人たちにも失礼だとい

うことをEさんは言う。「自分がやりたいからやっているという、助けてあげたいから助けたいというか、協力したいからっていうのがあるんじゃないかな」という、Eさんの言葉は、ボランティアに参加する人たちには多かれ少なかれある感情なのだろう。Eさん以外にもこうしたことを述べている人がいる。

ほんで、家内もそうやけど、困った、晩ご飯のあとの話やと、若い人が老人に対して気遣うときに、一緒にやってやるという感じのことを言うともものすごくそういうの嫌がるねん、怒るねん。

そういうね、まあ、あの、家庭がね、あの、そのかわいそうな、その困っている人には温かい手を差し伸べようと言う、あの、まあ一つのあれかな、僕が家内がと言う話じゃないけど、良く話題になるし。そういう話多いから、助けると言うことに関しては、当たり前やし、そういうことは当たり前という仮定的なところにあるんかな、隠されてるかわからん。それがどちらかと理由と、健康的な理由と、そういうなんが来てるかもわからんけどね。余裕がなければできんと。(Cさん)

Cさんの場合も、Eさんと同様なことが言えるだろう。ボランティアをしてあげるという気持ちでは、ボランティアを続けることは難しく、やっている人たちがしてあげたいという気持ちがなければ無理だと言うのである。こうした気持ちが、ボランティア活動に関わっている人達に共通してあるのかといえ、そうではないかもしれない。もう少し違う動機を持っている人もいるかもしれないが、この小論では、ボランティアをしていくためには自発的にしてあげたいと思わなければ続かない、という意見について少し考えてみる。

こうした気持ちはネガティブなものではないが、先ほど述べたような「やさしい関係性」とはまた違うのではないかと考えられないであろうか。やさしさというものを、対等な関係性の中でこそ成立するものなのだとすると、自発的

にしてあげたいと思わなければ続かないという気持ち、必要な要因であるかもしれないがそれだけでもいけないのではないか。贈与の論理に当てはめて考えるなら、ボランティアに参加している人たちが、対象者に対してなんらかの援助を施すという権力関係が生まれて来るのではないだろうか。

もちろん、ボランティア活動には権力性があると言ってしまうことはできない。今回聞き取り調査を行った日本語支援ボランティアに関しても、「してあげたい」という言葉は聞かれたが、あからさまに権力性を暗示させるような言葉は一言も聞かなかった。Bさんの話に、あからさまな感謝を求めたりはしていない、ということがあったように、上から下への関係にならないように、気をつかっているのもわかる。しかし、対象者との関係を対等な関係にたもっていくことは難しいのではないか。そうしたとき、お互いの関係性をより対等なものに近づけていくためには、どのような要因が必要なのであろうか。

聞き取り調査の対象者たちが言っていたことで、興味深かったのは「外国のことを知ることが出来ていい」というものであった。ボランティアに参加する人達も、対象者である外国の人から、その人の母国の話をいろいろ聞くことで自分の知的な好奇心を満たしているという、現実がある。わかりやすいのは、Cさんの意見である。

たとえば相撲の話をしたり、僕は三月ぐらいからきたから、桜の花見の、僕はベトナムのひとかな、ベトナムでは花見するの、そんな話したり。それで、回転寿司も多いから、ベトナムにはあるのとか、好きとかそう言う話から、その結婚式はどんなとか。もちろん地図でもベトナムのどの辺とか、教科書には世界地図が一応ついとるんですわ。北の方南の方とかいってね、ホーチミンならこっちの方とか言ってね、別に何かを探ると言うんではなくて、生徒の、生徒じゃないけれども、ざっくばらんにここよとか、思ったように異文化と接せられるなあと

言うことで、僕の目的としてほんとの生の正味の相手に接せられるのがあるんじゃないかなあと。(Cさん)

日本語を教えていきながら、その人たちの母国のことも聞いたりする。そうすることで知的な好奇心が満たされ、日本語支援ボランティアに対する参加意欲も維持できているのである。Cさんの場合、外国人と接するだけでなく、ボランティアに参加する年齢の離れた人達との交流も楽しいようである<sup>6)</sup>。自分とは違う考え方に接するのが楽しい、だからこのボランティアに参加しているのである。明確な意見である。

こうした、お互いが等価で交換できるものを持っていて、そうした交換関係を円滑に進めていくのであるなら、権力関係にたやすく転化してしまう贈与関係とはまた別の関係性が生まれていくのであろう。ただ、ここにあげた例は、Cさん個人の知的な好奇心によるものである。皮肉な見かたをするなら、ボランティア活動が権力関係を伴わない関係性を維持するためには、活動の運営者側の積極的に参加する理由なしにはありえないということなのであろう。

何かを得ることと、何かをしてあげたいことは類似的な考え方なのであろうか。“何か”ということは、ボランティアに参加している人達の数だけ違うものがあるだろう。その“何か”に参加している人達は考えながら、ボランティアに関わっているのであろう。何かを得たい、何かをしてあげたいということは、持続的なボランティア活動には不可欠なものといえるのではないか。

#### 4. ボランティア団体の運営について

何かを得たい、何かをしてあげたいということが、持続的なボランティア活動には不可欠なのではないかと前節では述べたが、もう少し具体的な、ボランティア活動の運営にも踏み込ん



でいきながら、「ありがとう」ということについてもう少し考えていきたい。ボランティアに関わる人達は「ありがとう」という気持ちだけでなく、謝礼などといったものに対して、どう対応しているのだろうか。

まずは、「ありがとう」という気持ちに関し  
てのスタンスであるが、前節で述べたようなことではないだろうか。では、ボランティアに関わる個人が感じる、気持ちに関することではなく、もう一つの「ありがとう」の表し方である謝礼などに対しては、どう考えているのであろうか。聞き取りした意見にも興味深いものがあった。以下に述べる。

(ボランティア活動は金銭的な対価を求めることはできませんよね、という質問に対して) 金銭的なつながりがね。金銭的なつながりがないので、ばらばらになりやすい。だから、ばらばらにならないように、如何にみんなが、そのような気持ちを持つことを、一つにすることを出来ない人間がいないとばらばらになりやすい。

中心的な人が抜けてしまうと、もうあとからガタツとなるケースがある。私が抜けても、後、いけるような形で、総力で、何をやるにもみんなが知恵を出すような形で、出してもらう、まあ全員参加という形で、普段から出しておかないと、自分だけがあれせいこうせいと自分だけがやっていると、抜けた時に、後、続いていくことが難しいと思うんで、そのようなことを考えながら、出来るだけみんなから意見を出してもらって、取り入れながらやっていくのが(中略)会社もいろんなことを考えないと全体の成果は上がらないのですが、まあ、会社の時は命令、指示で、金銭的なつながりがあるから、相手が少々嫌でもやらざるをえないということがあったけれども、ここでは、嫌だったら、ここではやめたらいい。だから、そういったことがないようにしていくことが変わったことかも。

(Bさん)

(行政との関係について) 募集の一つの手段として広報誌に。あのH市で活動するのでしたらH市の公報にあのう紙面の余裕があれば、いいですよってことで載せていただけます。

ですから特にS市からはVもそれからSもですね金銭的経済的な援助は全然無いということ

で。それでかえって県の方、ちょっと今年から変わりましたけれども数年4、5年とう年限がありましたけれども、年間に要請すれば活動費が例えば20万円ということできっと報告すれば上限10万円までは各グループに、ずっとではありませんが4、5年その順番、たくさんありますから、全員にということでグループに。4、5年だったと思うんです。

ですからVももう打ち切られましたし、BNも実は去年で年間上限10万円いただくというのも打ち切られましたので。それで講習会の受講料で少しまかなっていかないといけない。(中略)今のところSはまだそういう力はないんで、結局自前でやっていかないといけないということですね。(Aさん)

Aさん、Bさんは日本語支援ボランティアの運営に関わっている。そのため、具体的なボランティア団体の運営についていろいろと意見を聞くことができた。抜粋した意見は、そうした運営に関わる意見の一部である。

「ありがとう」という気持ちだけでなく、ボランティア活動においては、団体を運営していくために実際にいくらかの謝礼をもらう場合もある。先ほどのCさんは別のボランティアで、交通費という形で謝金を支給してもらっている<sup>7)</sup>。ボランティア活動をした人が謝礼や実費を受け取ることにについて、古川秀夫らの国際ボランティアに関する調査によると、ボランティア＝無償の行為というイメージから、現実にも無償の活動が多いことからすれば、なんらかの形で金銭を受け取ることにに対する抵抗感があるのではないかと、という想定があったが、「実費程度なら良い」という結果になったとしている(古川 2002:106)。

Aさんの意見にもあるように、実費を支払ってもらうことにそれほどの抵抗感はないようである。一般的に、ボランティアは「きれいな」イメージで語られてきた感がある。当たり前の話であるかもしれないが、ボランティアに対してのまなざしを再考するべきなのかもしれない。

## 5. 結論

ボランティアに関わる場合、贈与と言う視点に立って考えるなら、「何かを得たい、何かをしたい」という個人的、内発的な動機は、重要な要素となる。純粹贈与という形式を装いながら贈与は行なわれるという視点に立てば、純粹贈与という形式を装いながら、贈与関係を円滑に進めていくための動機として考えることができる。対して、「やさしい関係性」としての贈与という視点に立てば、お互いを尊重し、他者の成長を見返りとし自分の成長によってそれに答えようとする贈与の応酬を維持していくための、強い動機として考えることができる。

「何かを得たい、何かをしたい」という動機は、ボランティアに関わるときに重要であるだけでなく、ボランティア活動の維持という点からも重要であるといえるだろう。「何かを得たい、何かをしたい」という動機があってこそ、団体の維持への気持ちが強く働くのではないか。竹沢が言うように、共同体は存続を願う個の意志と行為によってのみ維持されうる場合、とくに動機は重要になるだろう。様々なボランティアは、新たな人間関係を模索する場といえるのかもしれない。

しかし、今村が言う「純粹贈与」に関する概念も、各個人がボランティアに関わるなかで、無視できない。この概念は、俗な言い方をすれば常にボランティアに「つきまとう」のではないか。ボランティアの対象者とボランティアの実施者とを考えると、対象者がなんらかの不都合を生じていて、実施者はその不都合を解消してあげたいと願い、不都合を解消するためにボランティアを行う。今回の調査対象である日本語支援ボランティアのケースで言うなら、日本語を在留外国人に教える教師が実施者、在留外国人が対象者となる。

「解消してあげたいという願い」は純粹なも

のであろう。だからこそ、「返礼なき贈与」つまり純粹贈与という概念を前提とする。このような関係は、今村の説を改めて持ち出すまでもなく、パラドクスを生じる危うさがある。ここでいうパラドクスとは「返礼を求めない行為であるとしながら、何かを得たい、何かをしたいと思うこと」である。何かを得たい、何かをしたいということは、返礼を求めているという実施者の気持ちであるといえるのではないか。実施者はパラドクスを解消すべく、様々な方法を考えていく。

よく言われるのは「共生」という考え方である。共生という考え方については紙面の都合上詳しく論じることはできないが、高橋憲昭の共生についての考察を簡単に述べる。高橋は共生という考え方を検討し、宗教との関係性を述べていく中で、中間的結論であることわりながら、『〈共生〉とは、異質な固体が相互に補完的な交換関係において生きている状態である。そして、異質なもの同士を結び付ける〈媒介的要因〉は、相互に自分が利益を得られる関係であり、それは、相互に他者に利益を与える行為の交換によって成り立つ』ものである。』と結論づけている（高橋：2002：38）。高橋の考え方は共生を分析的にみているので、ボランティア当事者が共生ということをどのように考えているのかは、別の論考も参考にしていただきたいが、少なくとも、共生という考え方にも交換、つまり贈与的な要素はあると言うことは出来るのではないか。今後の研究課題である。

本稿で言えることは、ボランティア活動は、抑圧的ではない新たな人間関係を創出していく可能性を秘めた、人間の営みであるということである。しかし、明確な交換としてではなく、贈与という要素がボランティアにあり、贈与という考え方の持つパラドクスが、ボランティアの関係性を規定してしまう場合もあるのではないか。ボランティアに関わる人達は、意識する、意識しないに関わらずそのパラドクスに向き合

いながら、新たな人間関係を作り上げているのではないか。共生の持つ贈与的な要素と同時に、このことも今後の研究課題として提示し、本稿をしめたい。

### 注

- 1) この調査は、2003年5月から9月にかけて、S県H市の日本語支援ボランティア団体である「S」の日本語教室で日本語の指導をしている、日本人6名に面接によるインタビュー調査をおこなったものである。対象者に関してはプライバシー等を配慮して、本文中ではAさん、Bさん・・・という表記にとどめることとした。
- 2) 本稿では詳しく論じないが、『交易する人間』第3章を参照。
- 3) レッシャーが言う主要な三つの福祉について、それを妨害するものについて、田代は、身体的福祉を妨害するものは病気、物質的福祉を妨害するものは貧困、精神的・心理的福祉を妨害するものは、その人の持って生まれた性格的なものもあるかもしれないが、最大のものは非行あるいは犯罪であろう（田代：1983），と述べている。
- 4) 今村は、前者を普通の非競争的な贈与行為とし、後者をモースが論じているポトラッチであるとしている。
- 5) 布施には財物を施す財施，教えを施す（説法）法施，恐れなき心を施す（恐怖心を取り除く）施無畏などがあり，以上に述べた三種類を三施とも言う。
- 6) 8月31日のインタビュー調査より。
- 7) 8月31日のインタビュー調査より。

### 参考文献

- Mauss, Marcel, 1951, *Gift, Forms and Functions of Exchange in Archaic Societies*, The Free Press (=1965, 有地亨訳『贈与論』蜷草書房。)
- 竹沢尚一郎, 1997, 『共生の技法——宗教・ボランティア・共同体』海鳥社。
- 今村仁司, 2000, 『交易する人間——贈与と交換の人間学』講談社選書メチエ。
- 古川秀夫編著, 2002, 『現代日本のボランティア像』龍谷大学国際社会文化研究所。
- 経済企画庁, 2000, 『国民生活白書（平成12年版）』。
- 三木 英編著, 2001, 『復興と宗教——震災後の人と社会を癒すもの』東方出版。
- 田代不二男, 1983, 『社会福祉とキリスト教』相川書房。
- 中村 元, 1981, 『佛教語大辞典（縮刷版）』東京書籍。
- 岩本 裕, 1969, 『布施と救済——大乘仏教』（世界の宗教7）淡交社。
- 高橋憲昭, 2002, 「『共生』の基本問題」（『浄土学研究』第28号 17-40）知恩院浄土学研究所。

### 付記

本稿は平成15年度佛教大学特別研究助成（代表：大東貢生）による研究成果の一部である。

（わたなべ しゅうじ

佛教大学総合研究所研修員）

（しんや まさあき

佛教大学総合研究所研修員）

## Volunteer Activities and the Idea of *Pure Donation*:

Based on Interviews of Volunteer Teachers

Shuji Watanabe, Masaaki Shinya

The purpose of this paper is to discuss the activities within the association of volunteer teachers of Japanese to foreigners. Beginning with some general views of volunteer activities in a context of welfare and gift-giving, the idea of *pure donation* is explained. Here after *kind relations* are focused upon to show the possibility of overcoming authoritarian attitudes often associated with gift-giving. The aspect of donation found in thoughts concerning the propagation of religion is discussed as an example of kind relations. This is continued with a discussion of the intention of *being of service to others*, a phrase that was often used by the interviewees. Finally, returning to the idea of pure donation and kind relations, the conclusion is drawn that volunteer activities contain the possibility of a renewable type of human relation.

Key words: volunteer, pure donation, kind relations